

# リカード・モデルの創造\*

久松太郎（同志社大学商学部）

## I はじめに

リカードが『経済学および課税の原理』(Ricardo 1951 ; 以下、『原理』) の外国貿易に関する有名な章で提示した 80, 90, 100, 120 からなる「4つの魔法の数字」(Samuelson 1969) は、貿易開始前の固定的な労働投入係数を意味するものと考えられてきた。現在の国内外の国際経済学のテキストブックでわれわれが知る「リカード・モデル」も、この解釈に基づいて組み立てられたものである。しかしこのような解釈に基づく理論は、リカード本人の言説との多くの不整合を露呈することになり、今ではそれら4つの数字を、貿易開始後における実際の取引に必要な特定量の財を生産するのに要する労働量と解釈するのが経済学史上の通説になりつつある。後者の解釈のもとでは、交易条件は確定済みであり、貿易利益は2つの数字の単純な引き算で労働の節約として求めることができる。リカード・モデルは、もはやリカードの創造物ではなかったのである。だとすれば、いったい誰がリカード・モデルを創造したのか。古典派期におけるその創造主とみなされたのは J.S.ミルであった (Ruffin 2002)。

しかしながら、トレンズが古典派期におけるリカード・モデルの創造にかかわっていたことを無視するわけにいかない。Hisamatsu (2016) では、トレンズがリカードの死後に展開してきた比較優位説がリカード・モデルの種々の想定にかなり類似していることを指摘し、彼が比較優位説提唱の優先権を主張したことによって世紀を超える研究者間の大論争が生じた事実に着目した。そこでは、トレンズによる優先権の主張が、同じ形態をした比較優位の原理をリカードも展開していたという解釈を表面化させ、彼らのどちらに優先権があるかをめぐって 20 世紀の著名な経済学者たちが権威ある学術誌で論争を重ねてきたことが、その解釈の普及を促進させることにつながったという仮説を提示した。本報告では、この研究成果を踏まえうえて、1840 年代初頭におけるトレンズ＝シーニア論争が J.S.ミルに与えた影響を検討し、20 世紀に完成した現代のリカード・モデルの原型を古典派期に与えた重要人物がトレンズと J.S.ミルであったことを示す。

## II 国際経済学の未解決問題？

リカード・モデルでは、交易条件は需要と供給によって決定され、それが両国の閉鎖経済下での相対価格の間に定まる場合に（貿易利益の発生を根拠として）貿易が行われると説明される。国際間での商品交換における価値の決定理論として、生産費説でもなく、あるいは

---

\* 本報告は日本学術振興会科学研究補助金(若手研究(B)16K17095)による研究成果の一部である。

労働価値説でもなく、需給説が採用されているのである。このような解釈がなされるようになったのは、国内では自由に移動できる資本と労働の国際移動の不可能性というリカードの主張とともに、「1国において諸商品の相対価値を規定するのと同じ法則が、2国以上の国々の中で交換される諸商品の相対価値を規定するわけではない」という彼の命題に端を発している (Ricardo 1951: 133)。

『原理』出版から約四半世紀後の1844年12月5日に開かれた経済学クラブの例会において、「リカードが「1国において諸商品の相対価値を規定するのと同じ法則が、2国以上の国々の中で交換される諸商品の相対価値を規定するわけではない」と述べたとき、彼は正しかったのか」という議題のもとで討論が交わされた (Political Economy Club 1921: 57)。議題を提出したのはJ.S.ミルだった。資本と労働の国際移動の不可能性を念頭に置きながら4つの数字を固定的な労働投入係数とみなしたミルは、リカードは正しかったが「国際交易条件」(「国際価値」)の決定問題を未解決のまま残したと考えた。『経済学の未解決問題』に所収されている国際貿易に関する第1論文では、こう述べられている。「価値は生産費に比例するという原理はこうして適用できなくなるため、われわれは生産費の原理に先行する原理、…すなわち需要と供給の原理に立ち返らなくてはならない」(Mill 1844: 8)。こうしてミルにおいては、国内での商品交換における相対価値の決定には生産費説が、国際間でのその決定には相互需要説がそれぞれ採用されるに至ったのである。

### III ミルとトレズ=シーニア論争

ミルによるリカード貿易理論の再構成が後世におけるリカード・モデルの現代的説明に与えた影響の大きさは否定し得ない。しかし、ミルに再構成のきっかけを与え、そうした再構成の方向性が正しいものであると彼に認識させたのは、トレズだった。そもそも、経済学クラブで討論された先の議題はトレズによって提出されるはずだったが、彼がこの日の例会を欠席したために、代わりにJ.S.ミルによって提出されたといういきさつがある。このことは、当時の彼らが交易条件の決定問題について関心を共有していたことの証左である。

ミルの証言によると、『経済学の未解決問題』に所収された諸論文は、「1829年から1830年にかけて執筆された」ものに「若干の用語の変更のみが施されて」1844年に出版された。このタイミングで出版された理由について、彼は「トレズ中佐の『予算』が引き起こした諸論争により、経済学者たちの関心が再び抽象科学の論議へと向いているように思われるからであり、また第1論文が、トレズ中佐とその論敵との間で争われている問題の核心に明らかに関係していると考えられるからである」と述べている (Mill 1844: iii)。

1840年代初頭、トレズは、「予算」という共通の論題をもつ諸論文や書簡形式の諸論説を続々と公表した。これらのいくつかを強烈に批判したのが、シーニアだった。トレズは、

「リカードの諸発見を防衛する」ために「戦いの前線にリカード本人を配置し」、シーニアからの攻撃に対抗した (Torrens 1843b: 14). トレンズの一連の著述は、「ミル氏の『論理学体系』で示された演繹法を若干の経済学問題の解決に応用した序論」を付して、『予算』と題する1冊の書物としてまとめられた (Torrens 1844). トレンズとその論敵シーニアとの間で議論され、ミルの第1論文と深く関連している「問題の核心」は、トレンズのシーニアへの反撃に見られる次の書簡形式の文章に集約されている。

私の主張では、国際交易条件は生産費ではなく需要と供給によって定まる。あなたの主張では、国際交易条件は需要と供給ではなく生産費によって定まる。私の見解では、外国商品の相対価値は国内商品の相対価値を定めるものとは異なる法則により定まる。あなたの見解では、外国商品の相対価値も国内商品の相対価値も同一の法則により定まる。(Torrens 1843b:14)

トレンズは、上述したリカードの命題を、「生産費は、同一国内で生産される諸商品の相対価値を定めるが、国を異にして生産される諸商品の相対価値を定めないという、リカードが提起した原理」(Torrens 1843b:14) と言い換えたうえで、交易条件が需要と供給によって決定されると言明したのである。国内交易と国際貿易との間で価値決定理論が異なる根拠としてトレンズが重視したのは、国際間での通貨価値の相違というよりはむしろ、労働と資本における国際間移動の不可能性であった (Torrens 1843a: 5-6)。

他方、この論争でシーニアが批判したトレンズの抽象的分析方法も、J.S.ミルが15年も寝かせてきた論文を世に解き放つ契機を与えることになった。シーニアによると、トレンズが与えた多くの例証は「単純」であり、多くの現実的な事象を考慮に入れることなく——例えば、「彼の注意を2国、せいぜい3国に制限することによって」<sup>1</sup>——「彼は、自ら想定した諸前提から、現実の結果とは異なるばかりか正反対であるとさえ思われる結論を導出し得ている」(Senior 1843: 15)。現実の経済データをいくつも利用しながら自らの理論を提示したシーニアは、トレンズの有名なイングランド＝キューバ・モデルを次のように批判している。

彼は今や貴金属を問題から除外し、次のように主張する。すなわち、イングランドとキューバと称される2つの国がただ2つの商品を交換する——イングランドはクロスと称される商品Aの唯一の生産者であり、キューバは砂糖と称される商品Bの唯一の生産者である——とすれば、他方の国によって課される関税に対して報復することは、いずれの国にとっても有益であろう、と。このことは真であると思われるが、そこからは何の実際的な推論をも引き出しえない不毛な真理のひとつであると思われる。(Senior 1843: 19; 強調は付加)<sup>2</sup>

<sup>1</sup>トレンズにおいては、3国が想定される場合も、そのうち1国は交換の媒介物となる金属の産出国であるため、経済取引を行うのは事実上2国である。

<sup>2</sup>シーニアによると、トレンズの「仮説的例証」における「あらゆる構成要素は想像上のものであり、フランスやイングランド、金属製品やワインといった単語は、都合よくAやB、XやZと置き換えてもよい」(Senior 1843: 15)。

「領域、肥沃度、人口、資本量、労働の一般的効率性を等しくする、キューバとイングランドという名で区別される2国<sup>3</sup>」(Senior 1843: 5) というシーニアのトレンズ理解からもわかるように、ここで仮定される2国のうちいずれか一方が大国であることはない。また、トレンズが3つ以上の商品（貨幣を除く）を例証にもち出す場合にも、各国はそれぞれの比較優位財に特化した2財の経済取引を行う構成になっている。さらに、資本と労働の2種類の生産要素が仮定される場合にも、それらのセットが1要素として財をうみだす関係に容易に読みかえられるものとなっている。

トレンズが比較優位の原理を事実上の2国2財1要素モデルで数値例によって初めて説明したのは、彼の『穀物貿易論』第4版においてである。そこには、貿易開始以前の固定的な単位あたり投入係数による説明と、「国内市場での外国商品需要と外国市場での自国商品需要との比率」による交易条件の決定への言及がすでに見られた (Torrens 1827: 401-3)。トレンズの理論は、ミルの第1論文執筆に数年先立って公表されたにもかかわらず、その当時はミルの関心をよばなかったようである。ミルの注目をあつめた要因のひとつは、1844年のトレンズの『予算』の副題に自身の『論理学体系』があげられたことであろう。いずれにせよ、事実上の2国2財1生産要素、固定的な労働投入係数、国内で移動できる生産要素の国際移動の不可能性、需給による交易条件の決定を含む、抽象的かつ単純なトレンズの理論モデルは、1840年代にミルによって大いに歓迎されたのである<sup>4</sup>。

第1論文を読むと、トレンズ中佐が広めてきたのと同じの諸原理にたつ見解（その実際の応用範囲となると、おそらくかなり異なっているだろう）を、本著者が15年以上にわたって抱いてきたということがわかるだろう。だからといって、本著者は、この論文にある重要な学説の創設者であるとは主張できないのであって、ただその完成者であるとしか主張できないのである。(Mill 1844: iii)

トレンズは、ミルにとって自身の将来性をいち早く認め経済学者としてのデビューの舞台を用意してくれた人物であるとともに、国内での商品交換における価値決定の理論をめぐって経済学者として最初に公に争った論敵でもあった。リカードとマルサスという二大巨頭が世を去った後のイギリス経済学界において生じたトレンズとミルの融合は、国際貿易論の考え方にひとつの方向性を与える契機となったのである。

---

<sup>3</sup>ただし、各国に存在する同一の要素における相対的生産性は異なっている。シーニアは、「商業世界全体を代表する…彼[トレンズ]の仮想的な2国」(Senior 1843: 9)を前提として議論することを繰り返し批判している。

<sup>4</sup>ミルはここに輸送費ゼロの仮定を追加している (Mill 1844: 7)。相似拡大的選好の性質をもつ効用関数の仮定を除けば、リカード・モデルの主要な仮定はこのときにほぼ完成したといえよう。

#### IV 結びにかえて

リカード死後の 1840 年代に国際貿易論の考え方における大きな転機が訪れ、トレンズと J.S.ミルによって古典派期におけるリカード・モデルの理論的基盤が形成されたといえよう。

しかしながら、古典派期におけるリカード・モデルの創設者として、ペニンントンに触れないわけにはいかない。彼自身が 1839 年に執筆したと証言している『フィンレイ宛書簡』において、固定的な労働投入係数、貿易利益をもたらす交易条件の範囲、生産費説による閉鎖経済価格の決定と需給による交易条件の決定を見出すことができる (Pennington 1840: 40-3)。しかも、トレンズ自身が『穀物貿易論』第 4 版の問題の箇所の執筆に際してペニンントンに言及しており (Torrens 1827: Advertisement for the Fourth Edition)、彼が『フィンレイ宛書簡』で展開されたと同様の内容を含むペニンントンの論述<sup>5</sup>より着想を得た可能性がある。しかし、20 世紀以後のリカード・モデルの完成に対してペニンントンが与えた影響は、ミルやトレンズのそれに比べるとはるかに小さかったと考えられるべきであろう。

また、リカード『原理』に数年先立って公刊された匿名の小冊子『外国産穀物の輸入に関する諸考察』(Anon. 1814) のなかに比較優位の原理に基づいた議論が展開されていたことが近年の研究によって指摘されているが、20 世紀末での再発見という事実からもわかるようにそれが 20 世紀以後のリカード・モデルの完成に直接寄与したとは考えられない。われわれが知る限り、このパンフレットの存在をその出版当時に言及した唯一の経済学者はトレンズであった (Torrens 1815: xiv)。この匿名のパンフレットとペニンントンの未発見の論述に時宜を得てアクセスできたトレンズは、国際貿易論の歴史における重要人物のひとりだったことは確かであろう。

#### 参考文献

- Hisamatsu, T. (2016). Constructing a Myth that Ricardo was the Father of the Ricardian Model of International Trade: A Reconsideration of Torrens' Principles of Comparative Advantage and Gain-from-trade, *Kobe University Discussion Paper*, No. 1630.  
(<http://www.econ.kobe-u.ac.jp/activity/publication/dp/pdf/2016/1630.pdf>)<sup>6</sup>
- Ricardo, D. (1951). *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I, Cambridge: Cambridge University Press.
- Torrens, R. (2000). *Collected Works of Robert Torrens*, 8 volumes, edited by G. de Vivo, Bristol: Thoemmes Press.

<sup>5</sup>トレンズのコブデン宛書簡 (6 月 6 日付) で言及された未発見の Pennington's "Essay on the Effects of the Corn Trade upon the comparative Scale of Prices" (Torrens 2000, V: 418) が、『フィンレイ宛書簡』の当該部分を論じたものだったのかもしれない。

<sup>6</sup>その他の参考文献については、Hisamatsu (2016) を参照して下さい。